View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by UTokyo Repository

『東京大学言語学論集』**41** (2019.9) 205-214

日本手話の動詞連続構文と結果表現

松田俊介
langue.french912@gmail.com

キーワード: 日本手話　動詞連続構文　結果表現

要旨

日本手話には動詞連続構文（serial verb construction）が存在する。本稿は、日本手話の動詞連続構文のうち、［NP_1 NP_2 VP_1 VP_2］という形式をもち、かつ VP_1 が表す事態と VP_2 が表す事態の間に因果関係が成立する用法を分析する。具体的には、①この用法が通言語的に「結果表現」と呼ばれているものに該当することを指摘する。②この用法を Washio（1997）が提示した結果表現の類型（STRONG resultatives・WEAK resultatives）に基づいて分析し、日本手話が WEAK resultatives を許し、STRONG resultatives を許さないことを示す。そして、③日本手話（および中国語、タイ語）の結果表現の中には、従来注目されていなかったタイプのものが存在することを指摘する。

1. 日本手話の動詞連続構文 –《シテ・ナラセル》用法–

日本手話[1]には、次の（1）のような動詞連続構文［NP_1 NP_2 VP_1 VP_2］が存在する[2]。

（1）/私/ /窓/ /拭く/ /光る/
「私は窓をピカピカに拭いた」[3]

（1）は私が窓を拭くという行為を遂行した結果、窓がピカピカに光るという事態を表している。つまり、（1）は日本手話の動詞連続構文が持つ用法のうち、「NP_1 が VP_1 という行為を《スル》ことによって、NP_2 が VP_2 が表す状況に《ナル》」という使役的事態を表す用法、いわば《シテ・ナラセル》という意味を表す用法の事例である[4]。

ところで、/拭く/という動詞は本来、拭かれる対象の変化を含意する動詞ではない。次の（2）を見ていただきたい。（2）は私が窓を拭いたが、窓には何の変化も起きなかったという事態を表す文である。（2）が容認されることからもわかるように、この動詞はもともと「～を（雑巾などで）拭く」という《スル》の意味だけを持ち、拭かれる対象の変化《ナル》を含意しない。

---

[1] 日本のろう者コミュニティーで話されている自然言語。基本語順は SOV。手や腕を用いて行われる「手指表現」に加えて、手以外の（眉や首、目などの）体の部分を用いて行われる「非手指表現」が存在する。本稿は、手指表現は/ /で、非手指表現は上付き文字で表現する。
[2] 動詞連続構文の類型論的研究については、Aikhenvald（2006）に詳しい。
[3] 本稿の例文の容認性判断は、断りのない限り、筆者が調査協力者から聞き取り調査によって得たものである。調査協力者は、①愛知県出身 30 代女性の日本手話母語話者、②神奈川県出身 30 代男性の日本手話母語話者。言うまでもなく、本稿に残るいかなる誤りも筆者の責任である。
[4] 日本手話の動詞連続構文には移動を表す用法も存在する。詳しくは今里（2017）を参照。

(2) /私/ /窓/ /拭く（目閉じ→目開き） / /変わらない/

「私は窓を拭いたが、何も変わらなかった」

しかし、(1) のように/拭く/の後に/光る/が来ると、/拭く/が含意しなかった窓の変化《ナル》が「補充」されて、文全体が《シテ・ナラセル》という使役の意味になる。(1) は、VP_1 が含意しない対象の変化を VP_2 によって補うことで使役の意味を表す用法である。

図 3 と図 4 はそれぞれ (3) と (1) の作用連鎖 (action chain) [5]を図式化したものである (○は参与者、⇒は《スル》、→は《ナル》を表す)。(3) のように/拭く/が単体で使われた場合には、文全体は《スル》という行為だけを表し、拭かれる対象の変化《ナル》を含意しない。それに対して、(1) は対象の変化《ナル》が/光る/によって補充された結果、文全体が《シテ・ナラセル》という使役の意味になっている。

(3) /私/ /窓/ /拭く/

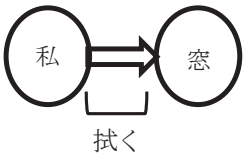

図 1 (3) の作用連鎖

(1) /私/ /窓/ /拭く/ /光る/

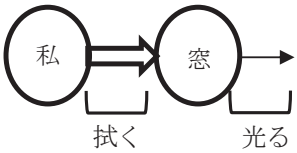

図 2 (1) の作用連鎖

次の (4) ～ (8) も、VP_1 が含意しない対象の変化を VP_2 で補充している《シテ・ナラセル》用法の事例である。

(4) /彼/ /彼女/ /刺す/ /死ぬ/
「彼は彼女を刺し殺した」

(5) /彼/ /彼女/ /殴る/ /死ぬ/
「彼は彼女を殴り殺した」

[5] 作用連鎖に関しては Langacker (2008: Ch.11) を参照。

(6) /彼/ /彼女/ /撃つ/ /死ぬ/
「彼は彼女を撃ち殺した」

(7) /私/ /窓/ /殴る/ /割れる/
「私は窓を殴って割った」

(8) /私/ /テレビ/ /リモコンを押す/ /画面が出る/
「私はテレビをリモコンでつけた」

例えば (4) は、彼が刺すという行為を《スル》結果、彼女が死ぬという状態に《ナル》という事態を表した文である。動詞/刺す/は (1) の/拭く/と同じように《スル》の意味しか持たないが、/死ぬ/が後続して《ナル》が補われることで、全体として《シテ・ナラセル》の意味になっている。

ここまでの観察から、次のような事実に気づかされる。すなわち、上でみた (1)・(4) ～ (8) が通言語的に「結果表現 (resultative expression)」と呼ばれている表現と意味的・機能的に類似しているという事実である。実際、(1)・(4) ～ (6) に対応する英語の例 (9) ～ (12) は、多くの論者が結果表現として問題なく認めるものである。(1)・(4) ～ (8) が典型的な結果表現と意味的・機能的に似ていることは疑いようがない。

(9) I wiped the window clean. (＝ (1))

(10) He stabbed her to death. (＝ (4))

(11) He beat her to death. (＝ (5))

(12) He shot her dead. (＝ (6))

しかし、(1)・(4) ～ (8) がいくら典型的な結果表現 (9) ～ (12) と意味的・機能的に似通っているといっても、形式面で差異がみられるのもまた事実である。典型的な結果表現 (9) ～ (12) では、対象の変化 (すなわち《ナル》) を表す結果述語は形容詞句または前置詞句である (dead, to death) のに対して、日本手話 (1)・(4) ～ (8) で、対象の変化を表す句は動詞である (/光る//死ぬ//割れる//画面が出る/)。したがって、もし形式を重んじ、結果述語を形容詞句と前置詞句に限定する立場に立つならば、(1)・(4) ～ (8) を結果表現として認めることはできない。

しかし、(1)・(4) ～ (8) が意味的・機能的に結果表現と類似していることは紛れもない事実であり、この点を見過ごすわけにはいかない。実際、影山 (1996) や宮腰 (2012) のように、意味的な基準によって日本語の複合動詞の表現を結果表現の一形態として認定する立場もある。意味的基準を重視する立場に立てば、(1)・(4) ～ (8) は典型的な結果表現が表す意味・機能と合致しているのだから、(1)・(4) ～ (8) を日本手話の結果表現と言ってはいけない理由は

ないであろう[6]。

2. 結果表現の類型

結果表現は 1970 年代ごろから今日に至るまで、多くの論者によって研究されてきた（小野 2007）。鷲尾龍一氏も、そのうちの一人である。本節では、鷲尾氏が提示する結果表現の類型を紹介する。

Washio（1997）・鷲尾（1997）は、ある言語の結果表現が、別の言語の対応する形式では容認されないことを指摘している。例えば、次の英語（13）は容認されるが、これに形式的に対応する日本語（14）は容認されない。

（13）The horses dragged the logs smooth.　　（鷲尾 1997: 92）

（14）*馬が丸太をすべすべに引きずった。　　（鷲尾 1997: 92）

また、次の英語・日本語（15）～（16）は容認されるが、これらに対応するフランス語（17）は不適格になる。

（15）I painted the wall red.　　（鷲尾 1997: 92）

（16）私は壁を赤く塗った。　　（鷲尾 1997: 92）

（17）*J’ai peint le mur rouge　　（Washio1997: 28）

つまり、結果表現には（少なくとも）次の 2 つのタイプが存在することになる。

（18）　a. 英語では許されるが、日本語・フランス語では許されない。
　　b. 英語・日本語では許されるが、フランス語では許されない。

このような言語事実に基づき、Washio（1997）・鷲尾（1997）は結果表現を STRONG Resultatives と WEAK Resultatives に分類している（STRONG Resultatives は（18a）に、WEAK Resultatives は（18b）に対応する）。

STRONG Resultatives（以下 STRONG）とは、結果述語の意味を動詞の意味から予測することが不可能なものであり、結果述語が動詞の意味から完全に独立しているタイプである。例えば（13）は、drag の意味から「すべすべな」という意味を予測することは不可能であるから、STRONG

[6] 柴谷（2002）は、類型論的研究を行う際に機能面を重視することに関して次のよう述べている。
言語間の類似ないしは文法範疇の普遍性については、終局的には機能面の類似あるいは共通性ということで把握されることになろうかと思われる。（中略）具体的には異なるものに対して同一の術語を適用したり、それらを同等のものとして取り扱うことを許すのも、個々の言語における機能の類似によるものである。（柴谷 2002: 45-46）

とみなされる。（19）も STRONG の例である。

（13）The horses dragged the logs smooth.　　（鷲尾 1997: 92）

（19）They ran their shoes threadbare.　　（鷲尾 1997: 93）

WEAK Resultatives（以下 WEAK）とは、結果述語が動詞の意味から完全には独立していないタイプである。最も極端な WEAK に現れる動詞は、「状態変化動詞」である。例えば（20）は、sharpen の意味にはすでに「尖る」という意味が含まれている。したがって、pointy は動詞がすでに含んでいる意味をさらに精緻化しているのであり、動詞の意味からは独立していない。

（20）He sharpened the pencil pointy.　　（鷲尾 1997: 93）

次の（21）の wipe は「～を拭く」という行為の意味だけを表す動詞であり、拭かれた対象の変化まで含意しない。したがって、一見すると clean は動詞の意味から独立しており、（21）は STRONG のようにみえる。

（21）She wiped the table clean.　　（鷲尾 1997: 94）

しかし、wipe は「変化の方向性」までは含意している。つまり、x *wipe* y には、「仮に y の状態が変化するなら、それは y に付着している異物が「除去」される方向に変化するという含みがある」（鷲尾 1997: 94）。したがって、（21）の clean が伝えているのは、動詞の意味から完全に独立した情報ではなく、動詞が含意する変化の方向に沿って具体的に変化が生じたという情報であり、（21）は WEAK となる。

次節では、1 節でみた日本手話の結果表現を Washio（1997）・鷲尾（1997）の類型のもとで分析してみたい。

3. 日本手話の結果表現の類型

Washio（1997）は結果述語を形容詞句に限定しているが、本稿は結果述語の範囲を動詞まで広げて議論する。

先で提示した日本手話の結果表現（1）・（4）～（8）は、結果述語（VP_2）が動詞（VP_1）の意味から完全には独立していないため、いずれも WEAK とみなされる。

（1）/私/ /窓/ /拭く/ /光る/
「私は窓をピカピカに拭いた」

（4）/彼/ /彼女/ /刺す/ /死ぬ/
「彼は彼女を刺し殺した」

(5) /彼/ /彼女/ /殴る/ /死ぬ/
「彼は彼女を殴り殺した」

(6) /彼/ /彼女/ /撃つ/ /死ぬ/
「彼は彼女を撃ち殺した」

(7) /私/ /窓/ /殴る/ /割れる/
「私は窓を殴って割った」

(8) /私/ /テレビ/ /リモコンを押す/ /画面が出る/
「私はテレビをリモコンでつけた」

例えば、(1) の/拭く/は行為《スル》の意味だけを表す動詞であり、拭かれた対象の変化まで含意しないため、一見すると (1) は STRONG のようにみえる。しかし、/拭く/は (21) の wipe と同じように変化の方向性までは含意している[7]。(21) が WEAK であるのと同じ理由で (1) も WEAK である。

一方、日本手話は STRONG を許容しない。次の (22) ～ (23) を見ていただきたい。

(22) */私/ /足/ /走る/ /折れる/
「私は走って足を折った」

(23) */私/ /窓/ /拭く/ /汚れる/
「私が窓を拭いたら汚れた」

(22) ～ (23) の結果述語の意味は動詞の意味から予測することは不可能である (例えば、(22) の動詞/走る/から「足が折れる」という結果を予測することは土台無理である)。したがって (22) ～ (22) は STRONG であるが、これらはいずれも日本手話の文として不適格とみなされる。

以上の考察から、日本手話は WEAK は許すが STRONG は許さない言語であることがわかった[8]。

---

[7] 次の (1') のように発話すると、通常は「窓の異物が除去されてきれいになった」と解釈される。したがって、/拭く/は wipe と同じように「変化の方向性」までは含む動詞であるといえる。
(1') /私/ /窓/ /拭く/ /終わる/
「私は窓を拭き終わった」

[8] 日本手話は WEAK と同じ形式では STRONG を許さないが、(23) に関して言えば、VP_1/拭く/を表現しているときに (首振りをしつつ) 目を閉じ、VP_2/汚れる/を表現する直前で目を開くという非手指動作を表現すると容認可能になる。しかし、この非手指動作の身分についてはいまだ十分な研究がなされていないため、この非手指動作を伴った文がそもそも動詞連続構文なのかは定かではない。本稿は、動詞連続構文の結果表現の用法を扱っているため、今回はひとまず日本手話は STRONG を許さない言語であると記述しておく。

4. 新しいタイプの結果表現

Washio（1997）・鷲尾（1997）は、結果述語の内容を動詞の意味から予測できるか否かによって、結果表現を STRONG と WEAK に分類した。この分類には、次の（24）のような強い想定がある。

（24）
動詞には、構文とは独立に規定できるような本来的意味がある。それは、結果表現の中でも変わることはない。

例えば上でみた（19）の動詞 run は、「走る」という自動詞としての本来的（すなわち構文とは独立に規定されるような）意味を具えている。この「走る」という意味は結果表現の中でも変わらない。そのような意味から their shoes が threadbare な状態になるという内容は予測できないため、（19）は STRONG とみなされる。

（19）They ran their shoes threadbare.

また（20）の動詞 sharpen は、本来的に（すなわち構文とは独立に）「尖らせる」という意味を持っている。動詞 sharpen の本来的意味は、結果表現の中でも相変わらず「尖らせる」である。そのような意味から、the pencil が pointy になることは予測可能であるから、（20）は WEAK となる。

（20）He sharpened the pencil pointy.

以上を踏まえて、上でみた（4）をもう一度見てみたい。上で（25）は「彼は彼女を刺し殺した」という意味でも用いられると述べた。しかし、実は「彼は彼女を殺した」という意味でも使うことができる。（25）には、2 つの用法が存在するのである[9]（図 5）。

（25）/彼/ /彼女/ /刺す/ /死ぬ/

（25）
- 用法 1:　「彼は彼女を刺し殺した」
- 用法 2 :「彼は彼女を殺した」

この 2 つの用法は、Washio（1997）・鷲尾（1997）の枠組みではどう分類されるのだろうか。

[9] つまり、日本手話は/刺す/ /死ぬ/（刺し殺す）で「殺す」を表すということである。これは、下位概念を指す言葉で上位概念を表す「提喩（synecdoche）」である。使役と提喩の関係については別稿に譲る。

用法 1 の/刺す/には、「(ナイフなどで) 刺す」という本来的意味がある。これは、結果表現の中でも変わることはない。「(ナイフなどで) 刺す」という意味から結果述語/死ぬ/の意味は容易に予測できるから、用法 1 は WEAK となる。

それに対して、用法 2 は具体的な殺害方法を指定していない (すなわち刺して殺したのか、殴って殺したのか、撃って殺したのかなどがわからない) 用法である。したがって、ここでの/刺す/の意味は、「被使役者 (彼女) が死ぬような仕方で何らかの働きかけを《スル》」ほどの抽象的意味であり、本来的意味とは異なっている。したがって、(25) の用法 2 は想定 (24) に反しているため、Washio (1997) の類型は適用できず、STRONG か WEAK なのかを議論することはできない。

Washio (1997) の類型が適用できない例は、日本手話に広く見られる。次の (26) ～ (27) を見ていただきたい。(26) の用法 2 の/切る/は「被使役者 (木) が倒れるような仕方で何らかの働きかけを《スル》」という抽象的意味であり、本来の「(斧などで) 切る」という意味から変化している。それゆえ、想定 (24) に違反しており、Washio (1997) の類型が適用できない。

(26) /私/ /木/ /切る/ /倒れる/
用法 1:「私は木を切り倒した」
用法 2:「私は木を倒した」

(27) /私/ /椅子/ /押す/ /倒れる/
用法 1:「私は椅子を押し倒した」
用法 2:「私は椅子を倒した」

中国語にも、Washio (1997) の類型が適用できない例が存在する[10]。例えば (28) の用法 2 の「砍」は「被使役者 (木) が倒れるような仕方で何らかの働きかけを《スル》」という抽象的意味であり、本来の「(斧などで) 切る」という意味から変化している。したがって、用法 2 が STRONG か WEAK かは論じえない。

(28)　他　砍倒　　树
　　私　切る-倒れる　木
用法 1:「彼は木を切り倒した」
用法 2:「彼は木を倒した」

(29)　他　推倒　　椅子
　　彼　押す-倒れる　椅子
用法 1:「彼は椅子を押し倒した」
用法 2:「彼は椅子を倒した」

[10] 中国語の容認性判断は、安徽省合肥市出身 20 代女性の中国語母語話者に行なってもらった。

(30) 他　晾干　　衣服
　　彼　掛ける-乾く　服
用法 1:「彼は服を掛けて乾く」
用法 2:「彼は服を乾かす」

タイ語にも、Washio（1997）の類型が適用できない例が存在する[11]。

(31) Chan　taak　paah　heang
　　私　掛ける　服　乾く
用法 1: 私は服を掛けて乾かす
用法 2: 私は服を乾かす

日本手話の一部の結果表現のみならず、中国語やタイ語など他の言語にも Washio（1997）の類型が適用できない結果表現が存在する。であるならば、日本手話と中国語、タイ語を同じ類にまとめるような類型が必要である。今後の課題としたい。

参考文献

今里典子（2017）「日本手話の移動事象表現」『神戸市立工業高等専門学校研究紀要』55: 63-68.
小野尚之（2007）「序論—結果構文をめぐる問題」小野尚之（編）『結果構文研究の新視点』1-31. 東京: ひつじ書房.
影山太郎（1996）『動詞意味論』東京: くろしお出版.
柴谷方良（2002）「言語類型論と対照研究」生越直樹（編）『シリーズ言語科学 4 対照言語学』11-48. 東京: 東京大学出版会.
宮腰幸一（2012）「日本語結果表現に関する予備的考察」『論叢現代語・現代文』9: 1-43.
鷲尾龍一（1997）「第 I 部 他動性とヴォイスの体系」中右実（編）『ヴォイスとアスペクト』1-106. 東京: 研究社出版.
Aikhenvald, Alexandra（2006）Serial verb constructions in typological perspective. In: Alexandra Y. Aikhenvald and R. M. W. Dixon（eds.）*Serial verb constructions: A cross-linguistic typology*, 1-68. Oxford: Oxford University Press.
Langacker, Ronald（2008）*Cognitive grammar: A basic introduction.* New York: Oxford University Press.
Washio, Ryuichi（1997）Resultatives, compositionality and language variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6(1): 1-49.

[11] タイ語の容認性判断は、バンコク出身 20 代女性のタイ語母語話者に行なってもらった。

When Serial Verbs in Japanese Sign Language Mean Resultative

MATSUDA Shunsuke
langue.french912@gmail.com

Keywords: Japanese Sign Language, serial verb constructions, resultative expressions

Abstract

This paper provides a detailed analysis of the serial verb construction [NP_1 NP_2 VP_1 VP_2] in Japanese Sign Language. In particular, it makes the following three points: (1) this construction can reasonably be regarded as resultative expression, (2) in terms of the framework proposed by Washio (1997), Japanese Sign Language allows WEAK resultatives, but not STRONG resultatives, and (3) there is one type of resultative expressions in Japanese Sign Language (as well as Chinese and Thai) that has received little attension.

（まつだ・しゅんすけ　東京大学大学院）